新年のご挨拶

平成 28 年 1 月 1 日
病院長　沼尾 利郎

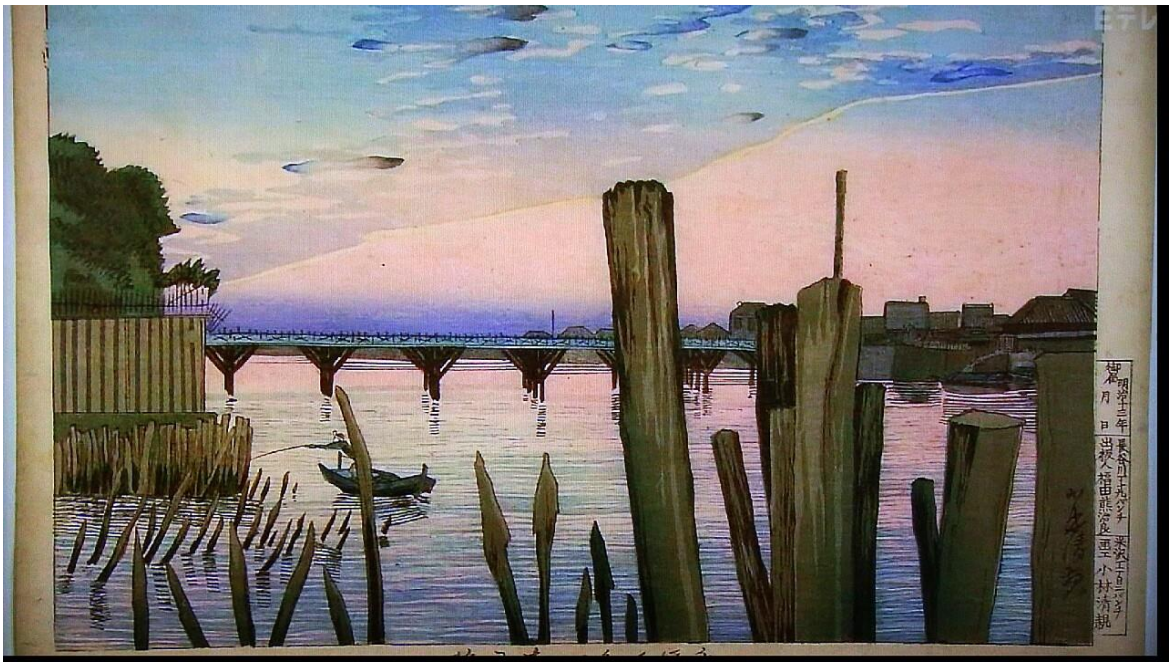
あけましておめでとうございます。皆様のご健康とご多幸を心からお祈りいたします。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、昨年は当院にとって「変化への対応力」が問われた年でした。平成 26 年秋には新病棟が完成して７対１看護体制（一般病棟）と地域包括ケア病棟（県内最大の 60 床）がスタートし、その効率的な運用が病院の大きな課題でしたが、お陰様で現在までの所はどちらも順調に推移しており、「診療の充実」と「経営の安定」を維持継続した上での全面建て替え（３年半後に完成予定）が今後の大きな目標です。

また、新年度にはＤＰＣ（包括医療費支払い制度）の導入を予定しており、平成 29 年度から始まる新専門医制度への体制整備（日本病院総合診療医学会の施設認定など）を現在進めていますが、その一方で医師不足による勤務医の過重労働の懸念もあり、「ふたつよいこと、さてないものよ」（心理学者　河合隼雄）すなわち「世の中は常に良いことと悪いこと、光と影がある」ということかもしれません。

「光と影」と言えば、「最後の浮世絵師」「明治の広重」と呼ばれた小林清親（きよちか）（1847-1915）の没後 100 年の回顧展を観る機会が最近ありました（馬頭広重美術館）。清親はその高い水彩画の技術と斬新な陰影法を用いて、文明開化で急激な変貌を遂げる江戸から東京への街並みや人々の暮らしを独特な表現で描き出し（光線画）、光と影の微妙なうつろいや色彩のかすかなゆらめきを情感豊かな作品に仕上げました。新しい時代に新しい表現を模索した清親のように、当院にも時代や社会の変化に対応してチャレンジし続けることが求められています。

医療を取り巻く環境が大きく変わりつつある現代は、あたかも明治維新のような大変革期なのかもしれません。しかし、時代がどんなに変わろうとも、私たちがなすべきことは変わりません。地域との連携をより一層推進させながら、治らない病気や重い障害があっても、住み慣れた地域で自分らしい暮らしが続けられるよう、「地域包括ケアシステム」の構築を目指して努力いたしますので、本年も皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。



「千ほんくい両国橋」（小林清親）